地球ミュージアム紀行

マケドニア博物館のお宝

ゴルダン・ニコロフ
民博 外国人研究員
マケドニア博物館上級キュレーター

遺跡や遺物で名をはせるところでは、
とにかく考古学的な話題、価値が注目されがちだ。
現代にいたるまで、その地に暮らしてきた人びとの営みも、
その国家にとって、価値ある「お宝」のひとつなのではないだろうか。

文明の十字路、マケドニア

マケドニアの起源はペリディカがマケドニア王国を創建した紀元前七世紀までさかのぼる。その後フィリッポス二世の治世にさらに栄え、アレクサンドロスの遠征によってその勢力はインドのヒマラヤやエジプトのピラミッドにまでおよんだ。一九九一年に旧ユーゴスラビアから独立した今日のマケドニア共和国は、ヨーロッパ、アジア、地中海世界を結ぶ南東ヨーロッパのバルカン半島中央部の重要な位置にある。古代文明、ビザンチン、スラブ、トルコなど、さまざまな文化、民族が混成してきた土地である。

首都スコピエの古い市場の中心にあるマケドニア博物館には、この国のエッセンスが詰まっている。一万平方メートルの敷地に六千平方メートルの展示スペースが広がり、考古学、民族学、歴史、中世美術の四つの部門から構成されている。旧石器時代、つまり紀元前一万年から、第二次世界大戦終了までの資料が合わせて六万点ほど収蔵されている。

充実した民族学部門

マケドニア文化の歴史に親しむには、ぜひ民族学部門の常設展を訪れてほしい。なかでも民族衣装と装飾品のコレクションは一番の見どころである。頭飾りやテュニックには飾りや刺繍（しゅう）が施されていて、特に、花嫁衣装は美しい文様で装飾されている。これらの模様は単なる飾りとしてだけではなく、子沢山、魔除（まよ）け、夫婦円満を願う象徴的な機能ももっていた。

もっとも見応えがあるのはソカイ、ウブルスとよばれる頭飾りであろう。赤・黒・白のふさ、古銭、「モニストラ」という小さなビーズ、貝殻などたくさんの飾り付けが見られる。精巧な装飾品は古い魔除けの象徴的要素を示している。一九世紀末から二〇世紀前半に作られたテュニックに施されている刺繍には中世の支配階級に特有であった文様が見られ、当博物館の所蔵品である一四世紀フレスコ画に描かれた女性の衣装と共通する。中世から今日まで途絶えることなかった伝統の連続性に驚く。

この連続性は色使いにも現れている。もっとも重要なのは赤色で、微妙に異なるさまざまな赤のトーンは自然染料を使った染めの技術による。この技術は二〇世紀初頭まで広く使われていた。赤の次に好まれたのは黒で、緑、濃い灰色、黄色、白も多少含まれた。刺繍は、直線やジグザグなどの単純な形から、より複雑な幾何学模様や葉や茎のない花文様の組み合わせよりなっている。

村落、都市部を問わず、宝飾品もマケドニアの伝統的女性衣装の重要な一部であった。アクセサリーは美しいだけでなく、社会的なステータス、信仰を示すものであり、また厄除けの意味があった。職人が作ったものもあれば、自家製のものもあり、またその種類は素材や製作方法によっていくつかのカテゴリーに分類される。植物性素材にはバジル、キヅタ、メギ、ゼラニウム、バラなどがあり、動物性の素材は羊毛でできたふさ・組みひも・フェルトボール、色が施された羽などである。その他の素材としては、モニストラ（ビーズ）、貴金属などが挙げられる。

特に、金、銀、真鍮（しんちゅう）、銅などの貴金属で作られたアクセサリーの種類はじつに多彩である。「パフタ」とよばれるベルトのバックル、「テペラク」という頭飾り、イアリング、首飾り、十字架、「テュステク」という鎖などの独特の装飾品はマケドニアのさまざまな地方に根付いた伝統を受け継いでいる。線状細工、粒状細工、鋳造、浮きあげ細工などの加工法の他に、真珠、珊瑚（さんご）、貴石、装飾ビーズによる飾り付けが見られる。これらはストルガ、オフリド、ビトラ、プリレプ、クルセヴォ、スコピエ、デバルなどにあるマケドニアのもっとも著名な工房の金属細工の名人たちの手による。かつてはマケドニア各地だけでなく、バルカン半島全体にも、こうした装飾品が流通していた。

この他にも、マケドニア博物館では、建築、木工品、商業道具、農具、楽器、陶・木・金属製の日常道具なども常設展示されている。マケドニアというとアレクサンドロスを連想する方が多いかもしれないが、この国の複雑で重層的な歴史を物語る文化遺産は古代の遺跡や遺物だけではないのである。

（山中由里子訳）

筆者の専門である陶器の展示

都市部の伝統建築と「トルコ風」衣装の展示

民族衣装の展示

マケドニア博物館の外観。背景に見えるのは、
オスマン帝国時代の名残であるモスク